

先週の礼拝メッセージ(2021年10月24日) ベン牧師

「愛に立つ者へと」 エフェソの信徒への手紙 3:14-17



今日の箇所では、父なる神を「御父」と記していますが、聖書でイエス様は、父なる神を「アバ(おとうちゃん)」と呼び祈られました。イエス様の十字架によって、私たちにとっても父なる神は、「おとうちゃん」と親しく近づいていくことのできる存在となってくださいました。

また、15節は「御父から、天と地にあるすべての家族がその名を与えられています。」とありますが、当時は、父という存在が大きく、家長の父から子供たち、親族というふうに広がっていくという考えでした。その考えを引き合いに出し、家族の大元は父、それも「天のお父さん」なんだということを語っているのです。「さらにすべての家族」の中には、神の家族である教会も入るわけです。

さらに16、17節「御父が・・・、あなたがたの内なる人を強めて、あなたがたを愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者としてくださるよう。」

皆さんは、普段の生活の中で愛に根ざし、愛にしっかりと立つ者、つまり、愛を基準として生活しておられるでしょうか。多くの方は、平穩無事な状態の中なら、意識せずとも愛をもって人に接し、愛をもって生活していることでしょう。しかし、何か心波立つことがあれば、怒りが込み上げたり、心配で心が満たされたり、とても愛を基準にしていますとは言えない状態になってしまうことがあるのではないのでしょうか。

16節に「あなたがたの内なる人」という表現がありますが、ここで言っている内なる人とはイエスキリストを指しています。ですからここは「あなたがたをキリストに向かって強めて」と訳すのが、より原語が言わんとしていることに近いと思います。

「私たちがイエスキリストに似た者となるように強めてくださるよう。」という祈りなのです。さらにそれを強調してパウロは、キリストが私

たちの心の内に住んでくださるようにと祈りを重ねるのです。イエス様が心の中心にいてくださったなら、私たちは愛を基準に生きていけるはずですが、しかし私たちの罪の性質は根深く、それゆえに、やったらやり返すとか、売り言葉に買い言葉ということが起こってしまうのです。

だからこそパウロは、父があなた方をキリストに似る者になるように強められ、心の中心にキリストを住まわせてくださるようにと祈るのです。それなしに愛に立つことなどできないからです。

クリスチャンになったから、自動的に愛のある人になるということはありません。イエス様とともに歩み、教えられ、学び、その中でキリストに似た者、愛を知る者、行う者となっていくのです。そして、キリストに近づけば近づくほど、その光に照らされ、今まで気づかなかった自分の醜さ、罪を知ることになるのです。それは、内なる聖霊の働きであり、聖霊によってのみ、私は変えられていくのです。このことを聖書の別の箇所で「わたしたちは皆、顔の覆いを除かれて、鏡のように主の栄光を映し出しながら、栄光から栄光へと、主と同じ姿に造りかえられていきます。これは主の霊の働きによることです。」(Ⅱコリント3:18)と表現しています。

主と同じ姿、そうです。主は十字架の上で罵詈雑言を浴びせられました。それに対して罵り返すことはなさらず、かえって人々の赦しを祈られました。その愛を受けた私たちが、どうして怒りや自己中心に身を任せることができるでしょう。聖霊は、私たちがイエス様に似た者へと変え続けてくださるのです。

パウロは、エフェソ教会の人たちがこの恵みに預かることができるようにと、心から祈っているのです。

自分の都合、プライド、感情を先に立たせるのではなく、イエス様に私の心の王座に座っていただきましょう。そして、主の愛を実践し、愛を与えましょう。その時にこそ、本当の意味で愛に立つ者、さらに愛に立つ教会となれるのです。

